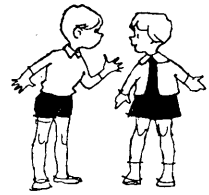


幼稚園四十年 (三)

菊池ふじの



就職したての二、三年の間というものは、私の場合、自分の担任の子どもたちをたのしく無事に過させることに精いっぱい、広い視野に立っての教材の研究とか、幼稚園全般のことなどにはいっこう気がまわらないで過していた。

毎日の保育も、その日その日ですんでしまうだけで、昨日と今日とのつながり、さらに明日へのつづきというようなこともなく、また同じ組の子ども相互の協力といった横のつながりも、砂場あそびや積木あそびなどのいわゆる自由あそびにおいて見られるだけで、毎日がぼつんぼつんと切れてしまうのであった。こういう保育を倉橋先生は、先生独得の表情やユーモラスなお口ぶりで「ちぎれ保育」とよんでおられたものだった。

先生となって二、三年もたち、心に余裕がでてくると、こうした毎日を過すことが、何となしに生気がなくなつまらないもの

に感じられるようになってきた。そして学校を卒業した当時、(大正十三年頃)その時代を風靡していたプロゼクトメソッドとか、ダルトンプラン、さらにあんなに傾倒していたジョンデューウィーの教育思潮などが私の心の中に勃然と頭をもたげてきたのである。

教育は与えるのではない。教え込むでもない。必要感を心にいだかせてこそ、目的を成就しようとする意欲が湧きである。ネセシティーを感じさせることだ、目的をもたせて動機づけをすることだ、と力説された倉橋先生のお講義も胸に浮かんできたのである。

子ども自身は、毎日がたとえ「ちぎれ保育」であっても、おぜいの友だちと、広い園庭で、豊富な遊具をつかって遊ぶことはどんなにたのしいことか知れないが、生命の流れていない

毎日を過すことに物足りなさいや気がさしてきたのはむしろ先生のほうがも知れない。

こうして幼稚園の先生として馴れてもきたし落ちついてもきたのであるが、こんどは別の意味でなやみだしたのである。

こうしたなやみ、模索の毎日の中で、子どもたちからも大変に喜びむかえられ、私自身も楽しく打ち込めることが二つできただのである。一つは子どもたちの共同の製作（後に誘導保育にまで発展した）もう一つは人形芝居である。

誘導保育の思い出

ひじり橋・動物園

ちょうどこのころ、お茶の水にひじり橋ができ上って、その時代としては珍しい形の橋、美しい姿の橋として世間の話題になっていくときであった。私も組の子どもたちを連れてはこの橋のよく見える本校（東京女高師のこと）の、クローバーの生え茂っている正門あたりへ遊びにいったものだった。

子どもたちといっしょに橋を眺めては話しあったりしていたのであったが、そうしているうちにふっと私の心に浮かんだのは、このひじり橋を、みんなで粘土で作ってみようということであった。

そのころはどの保育室にも砂箱があった。ちょうど畳一じよ

うぐらいの大ききで、

箱の内側にはトタンが

張ってあ

り、水を入

れても下へ

漏らないよ

うになつて

いた。箱の

四隅には脚

がついてお

り、その脚

の尖端には

車がついて

いて、箱が

重くなって

も容易に移

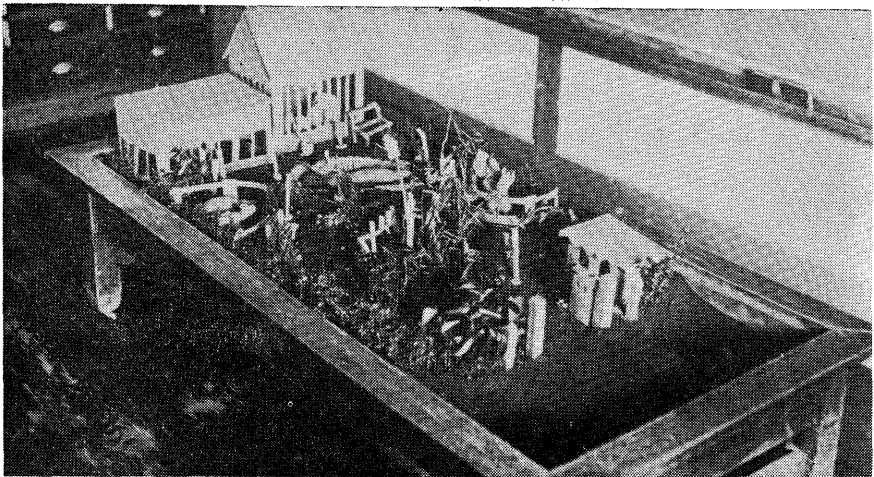
動できるよ

うになつて

いた。この

箱へ砂を入

サンドボックスによる活動・動物園



れると、室内で砂あそびができるのである。砂遊びをしないときは蓋をしてこの上に子どもの製作品を置いたり飾ったりしたものであった。

園庭にある砂場は園全体の共有であるから、ある組の特定のこと独占することはできない。

そこで胸に浮かんだひじり橋づくりは、しぜん保育室にある砂箱でということになる。

「みんなで、ひじり橋を粘土で作りましたよ」と話したときは、いままでこういうことをしなかつたので、子どもたちはどういふことをするのか見当がつかない、というような表情をしていた。

そこで先生もいっしょになって、砂箱の砂を固めてまん中にお茶の水川を通し、川の両岸に砂を高く盛りあげて土手にした。そしてこの土手には草をいっぱい植えて、お茶の水川の両側の土手のような景色にした。そしていよいよこの川へ粘土で作った、ひじり橋を架けるのである。

二貫目ぐらいの大きな粘土の固まりを、みんなで代る代る固めたり、粘土べらを使ってくり抜いたりして、漸くあのひじり橋らしい形ができた。こんなに大量の粘土をいじったことになかつた子どもたちは、ほんとうにおどろきと喜びとの交錯した気持でこのひじり橋を固めたり、くり抜く作業にはげんだのであった。

このころは粘土は小使のおばさんが、日頃心がけていてちょうど程よい固さにしておいてくれたのである。大きな粘土がめは小使室にあった。粘土を使うときは前もっておばさんに頼んでおくのである。組の先生から要請があればおばさんは、太い糸でこぶしぐらいの大きさに切つて組に持つてくる、先生はこれを粘土板にのせてひとりひとりの子どもに配つて粘土のしごどをはじめるといふ習慣になっていた。

それなのにこのひじり橋づくりには、いちどに二貫目もの大量を欲しいといったものだからおばさんの驚きようは大したものであったにちがいない。たちまち名古屋弁のおばさんに「大野先生は粘土をたくさん使いやす」といわれてしまった。新米の若ぞうが、いままでにないぐらいの使い方をしたものだから、ついおばさんの口から、前にいったような苦情がでたというわけである。

このひじり橋づくりには、話しあいの頃には、どうなるのか見当もつかない、いや私はきつと子どもたちは目を輝かせて参加してくるだろうと予測はしたのではあったが、このしごどをはじめてみると子どもたちはみな活気づいてきた。そして川べりの草を植える場合などは、みんな幼稚園の片隅の方から雑草をぬいてくるのであるが、先生は大いそがしで受け入れるのはいとまがないという状態を呈したものだ。

このひじり橋づくりに見られた子どもたちのいきいきした喜

び、喜び勇んで、この仕事に参加してきたありさまは、まったく予期した以上のものであった。いままで遊ぶ意欲もあまりなく、友だちとの遊びにも積極的ではなかった子どもでも、このひじり橋つくりにはいきいきと参加していた。この子どもたちの状態は、どんなに私を活気づけ喜びに満たさせてくれたか測り知れないものがあつた。

このようにして次には同じくこのサンドボックスに小規模な動物園をこしらえたのを思いだす。

動物は粘土で、柵や動物小屋は茶色のばふん紙で作つた。そして動物園内の樹木は、木の枝などをあしらつて動物園らしいものにした。

それからこのサンドボックスで田植などをしたこともあつた。六月の絵本には、よく田植のところを描いたものを採り上げてゐる。これは、われわれ日本人の常食であるお米のできる過程を知らせるねらいで編集してゐるものだと考えられるが、私も田舎育ちであり、お米は大切なものとして育てられてきたので、絵雑誌の編集には共感を禁じ得ないものを感じる。そこでこの絵本の絵や、このころに田舎の親せきにかけて田植を見てきたという子どもの話などをきっかけにして、田植という遊びを同じサンドボックスでやったこともあつた。

これは砂を平らにならして、そこへある間隔で苗（園庭に生えている雑草）を植えるだけのことである。

おもちゃや

何かを作ろうという組全体の目的をもち、それを成就するためにみんな協力するという生活は、子どもたちにどんなに喜びと活気を与えるかということ、身をもって経験した私は、幼稚園の生活にはこれがなくてはならないものと感ずるようになった。そこで私は次々とうこうした中心となる仕事（課題又は主題といつてもよい）を考えるようになった。サンドボックスを使つての小規模なものから、次第にわくを広げていって、次に行なつたのは、おもちゃ屋さんであつた。

これをすることにした動機は、私の担任の子どもの中に、その頃の台湾製糖という当時としては一流の大会社の重役の子どもがいた。おべんとうの時間など、自由なおしゃべりをしてゐるのを聞いているとき、その子どもは、「僕のうちはおもちゃやだよ」

とみんなに吹聴しているのである。そして鉄砲も売つてる、自動車も売つてる、それから何も売つてる……としきりに自分のうちはおもちゃやであると友だちにいっているのである。

それをきいたとき「ああ、あの子は自分の願望をいっているのだなあ、おもちゃというものは子どもの夢なのだなあ」と深く感動したのであつた。現代の子どもでは自分の家がおもちゃやさんだ、などという子どもはおらず、やれ人工衛星だの、ス

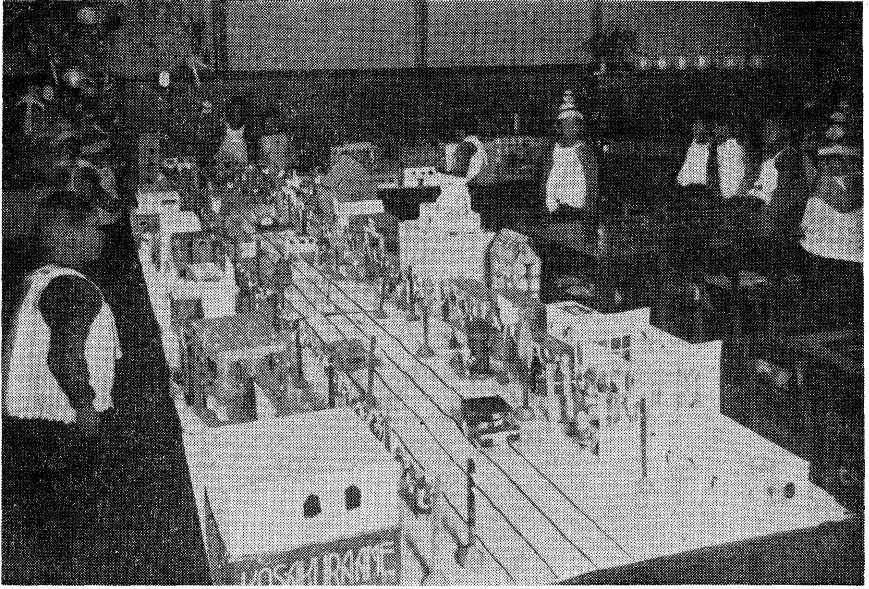


パーマンだのと時代を反映したことを口にしてるのであるが、あの当時は、「大きくなったら何になりたい?」ときくと、「大将になりたい」と答えた時代であったから、おもちゃやさんになって、たくさんのおもちゃを自由にいじりまわせるという夢は、子どもたちには相当にあったようであった。こんな子ども同志の会話にヒントをえて、おもちゃやという課題を中心にして、しばらくの間の生活を、おもちゃづくりと売り買いあそびについやしたのであった。

そのころの教材となるべき材料は、現在の豊富さには比ぶべくもない貧弱なもので、新聞紙とか、茶色の厚紙とか、馬ふん紙、画用紙などがせいぜいであった。

新聞紙で折ったかぶと——実際に子どもがかぶれる大きさ——新聞紙を二、三枚重ねて固く巻き、それにつばをつけて刀にしたり、画用紙で作った風車、こま、お面、手さげ、くび飾り等等、いまから思えばいたって幼稚なありふれた品々であったが、子どもたちは毎日々々おもちゃやさんをして幼稚園中のひとたちに売ってあげるのだといつてたいへん張りきって、毎日おもちゃづくりで熱中し、いろいろのおもちゃを山のようにたくさんつくって、売り出しの日を待ったのであった。

売り出しの日には、幼稚園中の子どもが、厚紙でつくったお金をもって買いにくるのであるが、売り手も買い手もたいへんな喜びようで、幼稚園中が興奮していたのを思い出す。



その当時の日誌に

このような生活は、子どもにとってどのような価値があるだろうか、と反省して

●実社会の売り買いの機構の初歩がわかる

●よろこびをもってすすんでものを作る

●陳列の初歩的な観念が養われる

と記してある。

暮の街——空箱を家にして——

現代ならまことにちんぷなアイデアにすぎないが、その当時としては、自分ながらとてもすばらしいアイデアだと思って、深い感動をもってこの生活に夢中になったものだった。

箱の形によって、この箱はビルディングによい、とか、円形の、帽子の入っていた空箱などはデパートによい、ここは一階、そして二階、三階、屋上などと自分までが夢中になり、ここにずうっと窓をくり抜いて、カーテンをかけてなどと、いさいで子どもたちと話しあっては家づくりをしたのであった。

それぞれうちができあがって街らしく並べてみると、街をとおっている電車も、それから街の並木もつくらなくては……と意見がでてくる。

このように、大なる喜びの中で第二学期を終ったのを思いだす。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)